

JFSTA NEWS

contents

会員通信	1
会務報告	4
事務局便り	8

会員通信

魚見桜の蘊蓄

上城義信

⑤殿様魚の栄枯盛衰

慶長6年(1601年)、初代日出藩主木下右太夫延俊が日出城を築城した。同じ頃芽吹いた魚見桜は、眼下に広がる別府湾と日出城天守閣を眺めて大きく生長した。

天守閣の真下の海では、海底から真水が湧いており、殿様魚と呼ばれるマコガレイの棲み家となった。そのマコガレイ、1700年～1800年代は、王余魚として珍重され、江戸の將軍様へも献上されたという。大正時代には現代俳句の始祖高浜虚子が「海中に真清水湧きて魚育つ」と詠み、一躍脚光を浴びた。



第31回城下かれい祭りオープン

昭和11～12年、木下謙次郎が著した我が国料理本の元祖「美味求真」に初めて城下鱈として登場する。そして戦後の経済成長の時代、グルメブームの波に乗って多くの文化人や食通の人々が日出町を訪れた。

一方で、マコガレイの棲み場所である浅場や干潟は埋め立てられ、藻場も消滅した。加えて地球の温暖化の加速により、自然産卵による再生産は危機的な状況にある。



殿様が愛したマコガレイ

そんな中、マコガレイを守るため関係者による懸命な活動も行われている。400年にわたる長い年月、その殿様魚を見守り続けてきた初代魚見桜は世代交代した。

マコガレイも、人工育成魚が城下の海を席捲する時代が訪れようとしている。

平成28年5月21日(土)、小満の朝、桑の葉が茂り、蚕が育ち始める季節、日出魚市場の朝市調査を行った。セリ開始1時間前の岸壁には朝漁から戻った漁船から魚を運び、せり場の小間は次々と埋められ、満員御礼となった。

13小間に494函が並んだ。これは前月(4月)に比べて36函少ない。ジンドウイカ、ボラ、コノシロの減少が大きい。一方、種類数は、64種と前月に比べて15種増加した。

珍しいのは、ウチダトビウオ、ダツ、ヒラスズキ、そしてヒラマサなど。増加は、マアジ、マルアジ。マダイは横ばいが続く。

5月の水揚げ魚ベスト10には、魚類が7種、軟体類が2種そして甲殻類が1種入り、第1位から順に、マアジ、サルエビ、マエソ、マルアジ、イシダイ、ボラ、コウイカ、マダコ、クロダイそしてカワハギの順となった。

旬魚も揚がった。トビウオ科のウチダトビウオ。胸鰭軟条(11)と尻鰭軟条(6)および胸鰭の無色透明が識別のポイント。その昔、豊後水道の水ノ子でシイラに追われ、200m以上も飛び交う様子を目にした。



ウチダトビウオ

焼くとやや繊維質でパサパサ感があるが、三枚に下ろして厚めの刺身にすると、独特のもちもち感があり、旨みが口に残る。

コノシロ(ニシン科)は、初夏が産卵期。小型のものは握り寿司にする。粒が小さい卵は煮付けにする。アオリイカ(ヤリイカ科)も旬魚。鰭がまるく大きい。雄と雌では背中中の模様が異なる。



コノシロ



アオリイカ

食用のイカ類では、トップクラスの旨さ。胴を開いて、3等分のサクにする。斜めに包丁目を入れると食べやすい。

旬の極みは、マコガレイこと城下かれいに尽きる。今朝のセリにも8函が出された。1函当たりのセリ値は、2,000円から2,500円。やや小振りの2歳魚が主体なので、家用には手ごろな価格だろう。最高値は、ヒラマサの15,000円(1尾あたり)、イセエビも1尾4,000円、サザエは函当たり3,500円の値が付いた。

初夏の朝、60種を超える魚介類が主役の朝市。今日も多くの朝市を愛する人々が集まってきた。

カレイ獲れ、笑顔で運ぶ 漁夫の妻

⑥マコガレイの色白美人

梅雨真っ盛り。農家では芒種とあって田植えや野菜の種まきの季節だが、海ではお産のシーズン。アオリイカ(藻いか)、マダイ、マゴチが岸近くにやってくる。

一方、産卵を終えたマコガレイ(城下かれい)は、体力アップの真っ最中。美味しくて、栄養価の高い餌を探して、別府湾内を東奔西走している。

かつて海底に真水が湧き、アマモ等の海草が広がる浅瀬には城下かれいだけでなく貝類や甲殻・軟体類、魚やウミガメなど様々な生き物が暮らしてきた。

豊かな海草が残された海域こそ、本来もっと積極的に保護を進めるべきところだろう。埋め立てなどで浅場を失くしたが、海草のアマモが少しづつ戻りつつある。

そんな中に我が魚見桜も惚れ惚れする色白

美人のマコガレイがいる。有眼側の一部あるいは全部の色素が欠如し、眼だけ黒くてチャーミング。チロシナーゼの活性が抑制されて、メラニン色素の形成がなされなかったからだ。天然記念物の白蛇も、アオダイショウの白化美人である(岩波生物学的辞典第四版から)。

6月18日(土)梅雨の中休みか早朝から太陽の光が眩しい。漁から帰った底曳漁船が岸壁に繋がれており、サギ鳥(アオサギなど)が帆柱からセリ場の魚を狙っている。

今朝の水揚げ魚は、全部で62種。その内訳は、魚類が45種、軟体類が10種、甲殻類が7種で、魚類の占める割合が7割以上と断然多い。



マコガレイの左眼(逆位)白化個体

水揚げ魚上位10魚種の内訳は、魚類が7種と多く、軟体類が2種そして甲殻類が1種となった。ベストテンには、サルエビがマアジとの熾烈な首位争いを制して、首位の座が交替した。マエソも上位を堅持し、第4位のジンドウイカは、前月より25函増加した。第5位にはマダイが、6位にはアオリイカが17函、19函と顕著な伸び、第7位のマダコは漁期の始まり、第8位のメイトガレイは健闘が光る。第9位のウチダトビウオは先月から引き続いての好漁だ。第10位のクロダイも定置網で好漁が続く。

番外では、5月に引き続き、旬のマコガレイが好漁。ただし、やや小型で、セリの価格は、お買い物客には求めやすい。

競りの落札価格を見ると、最高値は、一尾4,000円のマコガレイ。次いで、サザエが3,500円、アオリイカ2,000円、オニオコゼ2,000円、そしてマハタの1,500円と続いた。

梅雨が明けると、真夏がやってくる。アジの冷汁、スズキの洗い、ハモの湯引きなど暑気祓いには朝市での新鮮な魚が待っている。

マコガレイの色白美人は、大分マリンパレス「うみたまご」の城下かかれいコーナーと日出町観光物産館「二の丸館」の展示水槽で観察できます。

今月の来遊珍魚(写真撮影:松澤京子)



ヨコスジフェダイ(フェダイ科)



ヨスジフェダイ(フェダイ科)



クロサギ(クロサギ科)



アカタチ(アカタチ科)



オニオコゼ
(オニオコゼ科)



マハタ
(ハタ科)

梅雨海に真鯛と藻烏賊卵産む



調査中の筆者

平成27年度通常総会の開催

平成28年6月19日(金)、三会堂ビル2階S会議室において、平成28年度通常総会が開催されました。



会議は川口恭一会長及び来賓の(国立研究開発法人)水産研究・教育機構遠藤久理事の挨拶の後、川口会長を議長に選出。平成27年度事業報告・決算等に関する第1号から第5号の五つの審議事項及び平成28年度事業計画・予算に関する報告事項(総会資料参照)について審議し、総会参加者85名(出席者25名、委任状60名)全員の承認が得られました。



挨拶する川口会長

挨拶する遠藤理事

会長挨拶要旨

まず、この度の熊本大地震で被害に遭われた方々にお見舞い申し上げますと共に早期の復興をお祈り申し上げます。

これまでを振り返ると当協会は会員各位のご理解を得ながら充実・発展してきている。会員

数は当初38名から出発し、本日時点で正会員96名、賛助会員32団体となり、早晩、正会員数100名を越すと確信している。

このような状況の中、事業規模も拡大し、平成21年スタート時の250万円程度の規模から、平成26年度現在は5億5000万円に達する規模に発展し、自主事業あるいは受託事業において、民間企業をはじめ市町村、水産研究・教育機構、さらには農水省、国交省等々から仕事を頂戴して事業を行っている。これも、ひとえに会員をはじめ多くの関係者のご支援の賜と感謝を申し上げる次第である。また、そのような状況にあわせて事務局体制の充実も進め、本部で14名、東海北陸支部に3名、更にNPO法人に6名が出向している状況である。

本年度の展望について申し上げます。まず一つ目は会員数の拡大と会員活動を強化することである。全国ネットを構築し、会員不在の県が無いようにして全国を網羅して会員全体が活動していけるような姿を目指す。そのために営業の方も一層充実していきたい。

二点目は、自主事業あるいは企画事業等の着実な実施である。昨年度創設した水産業技術センター事業による試験研究の支援事業や技術開発の普及事業の確かな遂行である。現在、全国の水産試験場長の皆さんと具体的にどういことがやっていけるか相談をすすめているところである。

三点目は一般社団法人としての組織を確かなものにしていくことである。このことは避けて通れない重要な問題であり、協会の運営基盤を強化し、財務の面や実施体制面でしっかりと対応していきたい。昨年度に8階に会議室を開設したのもその一環であり、あわせて、職員の福利厚生面の充実、職員の退職金制度の整備等の面でも対応できるようになってきた。

最後に、最も基本的なこととして、会員の活動の機会を極力多く確保して、協会の事業の持続的充実を踏っていくこととしている。

平成27年度実施事業・平成28年度の事業計画の概要 平成27年度実施事業

1. 自主事業

- 1) 沿岸域の豊かな漁業生産の維持に関する研究会
- 2) 国立研究開発法人水産総合研究センターとの懇談会
- 3) 漁場造成・再生用資器材の技術評価事業
- 4) 漁場環境修復技術評価事業
- 5) 水産業技術センター事業（新規）
- 6) 特定非営利活動法人水産業・漁村活性化推進機構業務
- 7) その他の事業
 - (1) カイヤドリウミグモに関する勉強会
 - (2) 二枚貝類浮遊幼生の同定手法に関する検討会議
 - (3) 最先端技術による種判別手法勉強会
 - (4) 環境省の「水質汚濁に係る生活環境の保全に関する環境基準の見直しについて」（報告案）に対するパブリックコメントへの意見提出

2. 受託事業

- 1) 有明海水産基盤整備実証調査
- 2) 名古屋港新土砂処分場漁業影響検討業務
- 3) 名古屋港新土砂処分場漁業影響分析業務
- 3) 特定非営利活動法人水産業・漁村活性化推進機構業務
- 4) 三河港堤防（北）環境影響検討業務（新規）
- 5) 施設の更新に伴う漁業影響調査
- 6) 設備の変更に伴う漁業影響調査（新規）
- 7) 浚渫土人工石安全性試験（新規）
- 8) アワビ放流効果調査
- 9) 養殖産業の実態と研究開発ニーズ調査業務

3. 技術者データベースの作成

4. 技術支援等

- 1) 技術指導
- 2) 専門家の紹介

5. 出版物の配布・連絡事務代行

- 1) 会報（JFSTA NEWS）の発行
- 2) 協会ホームページの充実
- 3) 出版物の配布
- 4) 連絡事務代行

平成28年度実施予定事業

平成28年度においては、引き続き会員数拡大のための活動を進めるとともに、協会内・外部からの技術者紹介要請への迅速な対応、会員への資料・情報提供などの基本的事業の充実を図る。また、協会の組織的な機能を発揮するため、財政基盤を強化し、調査研究の立案・実行に努める。

1. 自主事業

- 1) 設立10周年記念事業準備委員会の組織化
- 2) 研究会等の開催
- 3) 国立研究開発法人水産研究・教育機構との懇談会
- 4) 漁場造成・再生用資材の技術評価事業及び漁場環境修復技術評価事業
- 5) 水産業技術センター事業
- 6) 特定非営利活動法人水産業・漁村活性化推進機構業務

2. 受託事業

- 1) 有明海水産基盤整備実証調査事業
- 2) 名古屋港新土砂処分場漁業影響検討業務
- 3) 三河港環境影響検討業務
- 4) 設備の変更に伴う漁業影響調査

3. 技術者データベースの作成

4. 技術支援等

- 1) 技術指導
- 2) 専門家の紹介

5. 出版物の配布・連絡事務代行

- 1) 会報 (JFSTA NEWS) の発行
- 2) 協会ホームページの充実
- 3) 出版物の配布
- 4) 連絡事務代行

6. その他

現在の会員数は、正会員が96名、賛助会員が32法人であるが、協会の基本的な活動源たる会員の拡大は最優先すべき活動目標であり、役員と会員が協力して、多様な組織ルート、個人的なルートを通じて新規加入者の獲得に向けた勧誘活動を行う。

有明海通信

—有明海魚介類漁の再生を目指して— (第13号) の発行

6月4日付けで有明海通信を発行しました。その中から平成28年度業務の取り組みについて抜粋して紹介します。

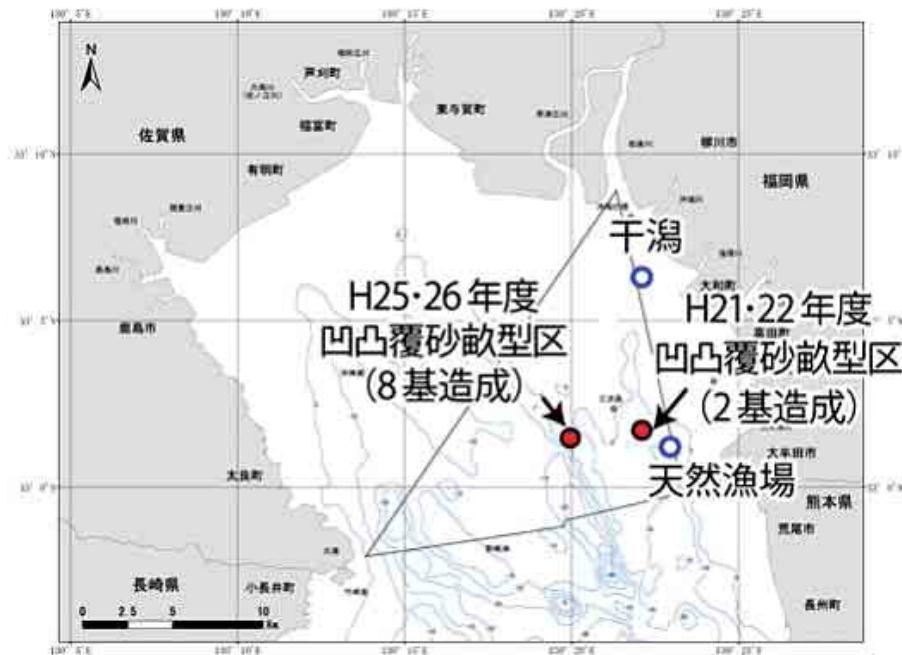
1. 平成28年度業務に於ける取り組み

1) タイラギ浮遊幼生の発生及び着底状況の確認

タイラギ浮遊幼生の発生状況や覆砂漁場への来遊状況調査について、今年度は2箇所凹凸覆砂畝型区、天然魚場および干潟において6月から10月まで、概ね7日から10日間隔で調査を実施する。

今年度から福岡・佐賀・長崎・熊本の四県協同調査と同様に、ポンプによる底層水採取を実施し、四県協同の二枚貝類調査に協力する。なお、諫早湾口部でのみ、従来のプランクトンネットによる採水を実施する。

また、今年度もタイラギの着底状況を確認するために、2箇所の凹凸覆砂畝型区、天然魚場および干潟において、平成28年4月から平成29年2月までの期間、漁業者や福岡県、佐賀県等の研究機関からの漁況・海況に関する情報に基づいて成貝および稚貝の生息状況を調査する。



有明海湾奥部における着底調査地点

2)タイラギ天然稚貝及び人工種苗を用いた移植試験

凹凸覆砂畝型工がタイラギ稚貝の生残・成長に及ぼす効果及び凹凸覆砂畝型工の母貝成育場としての機能の実証を目的として、平成21・22年度凹凸覆砂畝型区に着底した27年級群ならびに有明海産のリシケタイラギ母貝から生産した人工種苗（平成26年度産・平成28年度産）を凹凸覆砂畝型工に移植し、その後の生残、成長等の経過を観察する。



移植予定の天然稚貝（平成27年級群）

3)凹凸覆砂畝型の形状確認

凹凸覆砂畝型工の覆砂層厚は、時間の経過とともに低下することが想定される。今年度は、平成21・22年度凹凸覆砂畝型区の施工後の形状を追跡調査し、造成工事の管理基準の策定に必要な情報を集積するとともに、これまでの調査結果を整理し、凹凸覆砂畝型工の設計ならびに施工に関する管理基準、造成の手順等をまとめた手引書を平成29年度までに作成する。

4)漁業日誌調査

覆砂による漁場造成により、たいらぎ漁やたいらぎ漁以外の魚介類漁の増産効果が期待されることから、刺網、かご漁業および釣漁業等の漁業者に操業日誌（操業場所や漁獲量を記録）の記入を依頼し、その効果を解析する。

5)タイラギの餌料環境等の生息環境条件の確認と「立ち枯れへい死」の原因の検討

タイラギは主に植物プランクトン等の海水中の懸濁物や底泥中の微細藻類を餌としている。これまでの調査結果から、タイラギは沖合や干潟といった生息場所の違いで、餌の種類に差があることが示唆されたものの、タイラギが実際に何を餌とし、その餌によるタイラギの健康状態や成熟への影響については明らかにされていない。今年度は、凹凸覆砂畝型工、天然漁場および干潟等で海水や底泥を採集し、それらに含まれるタイラギの餌の量や種類を場所ごとに比較する。また、連続観測機器を設置し、水温、塩分、溶存酸素量、クロロフィル量および濁度を観測し、タイラギが生息する環境の水質を把握する。あわせて、これらの調査地点で採取される天然産タイラギと凹凸覆砂畝型工に移植したタイラギの成長や健康状態を比較し、餌の違いによるタイラギの健康状態や成熟の差異からタイラギの好適環境条件を検討する。

また、タイラギの生息・餌料環境を解析することにより、有明海湾東部海域における「立ち枯れへい死」と餌料環境との関連について検討する。

6)たいらぎ漁業再生に向けた取組について

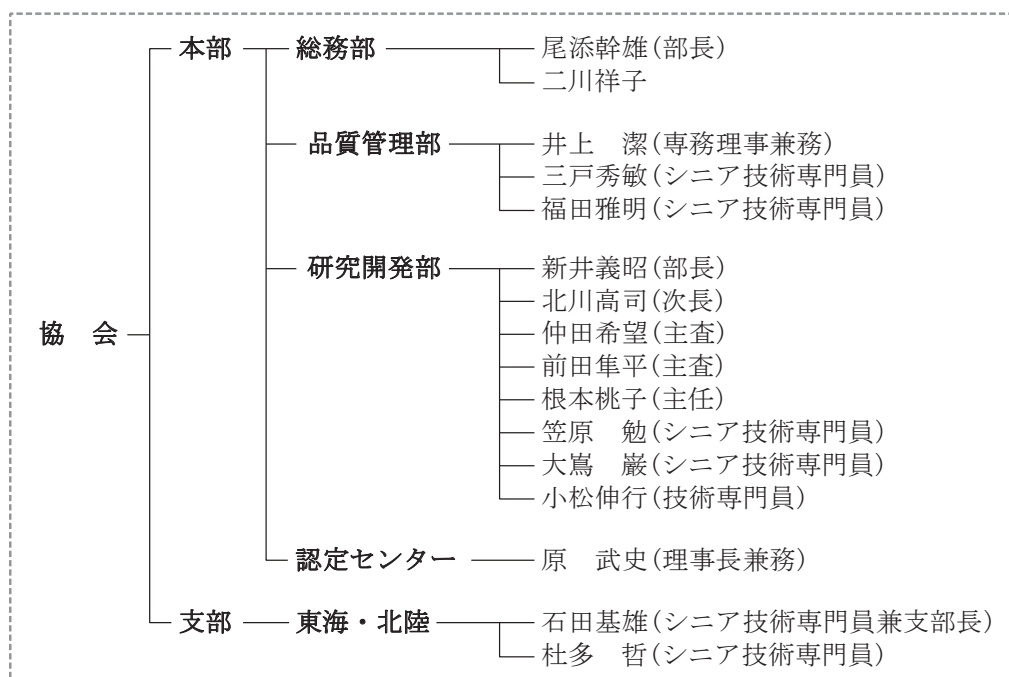
学識経験者、有明海沿岸の関係県の試験研究機関、漁業関係者等を構成メンバーとする検討委員会を組織し、効率的に調査を実施する。また、ありあけうみ通信の発行等を通して有明海と漁業に関する情報を広く共有することによって、タイラギのへい死原因の解明に取り組む。

事務局便り

新組織体制

本年度は役員改選の年で、小坂理事の退任に伴い、新たに川真田憲治、上城義信両氏の就任が総会に於いて承認され、理事14名、監事2名の体制となりました。また、新たな理事による理事会（第3回）において、会長に川口恭一理事、理事長に原武史理事、専務理事に井上潔理事、顧問に松里壽彦氏が再任されました。

また、平成28年度は事務局メンバーにも変動があり（図）、本部では総務部の倉澤陽子、森脇哲二両氏が退職し、新たに二川祥子氏が採用され、シニア技術専門員では東海・北陸支部の鈴木満平・本多是人両氏が退職し、新たに笠原勉氏が採用され、品質管理部に福田雅明氏が新たに加わりました。



新規入会者

福田雅明、藤井明彦、田添伸、寺脇利信、小谷裕一氏の5名の入会により、会員総数は96名となりました。また、有限会社オーシャンプランニングの入会により賛助会員は32機関となりました。

(平成28年6月30日現在)

全国の都道府県を網羅した組織づくり活動

平成28年6月現在で岐阜、滋賀、京都、佐賀の4県において新たな会員の入会があり、現在会員がいない県は秋田、山形、福島、栃木、群馬、茨城、石川、鳥取の9県です。